

農民の幸福に生涯をささげた詩人、童話作家 宮沢賢治(1896～1933年)

【略 歴】

1896年(明治29年)岩手県花巻市に生まれる。5人兄弟の長男、家は裕福で、熱心な仏教徒。少年時代から植物採集や鉱物採集に熱中する。盛岡高等農林学校(現在の岩手大学)にいちばんの成績で入学。在学中、短歌や詩などを同人誌(仲間で作る雑誌)『アザレア』に発表した。体を悪くした1918年(大正7)の夏ごろ童話を書き始めた。1921年から花巻農学校の教師をしながら同人誌や新聞に詩や童話を発表し、1924年に詩集『春と修羅』、童話集『注文の多い料理店』を自費で出版する。

1926年に農学校を辞め、若い農民達を集めて農学や芸術論などを講義し、農民のための活動を精力的に行い、自らも農民として生きた。しかし、1928年過労と栄養失調が原因で病気になり、1931年9月からはほとんど寝て過ごす。1933年(昭和8)37歳で亡くなった。

【作品の特徴】

賢治は友だちを大切にできる優しい心を持ち、自然を心から愛していました。人間も動物も自然も一つになって、心を通わせるといふ、自分の理想の世界や夢を、童話の中で実現しようとしていました。童話の舞台は、目の前の林や野原であったり、風のふく山であったり、星のかがやく夜空であったり、身近な場所でしたが、それでいて、読む人を不思議な世界へ運んでくれます。夜空に輝く星々をながめ、その思い出がもとになり『よだかの星』を、冬山に登った時に見た雪の感触の思い出は『雪わたり』という童話になりました。賢治の生涯で最も悲しい出来事は、妹のトシの死でした。その深い悲しみを『永訣の朝』という詩で表現しています。トシと同じ病気になった病の床で、「もう一度健康になればこのような人生を歩む人になりたい」と、ノートに書きとめたのが、『雨ニモマケズ』です。この言葉(詩)はあまりにも有名で、今も人々の心を打つ言葉です。

【おもな作品】※は生前発表作品

- 『注文の多い料理店』(1924) ※
- 『セロひきのゴーシュ』
- 『どんぐりと山猫』 ※
- 『雨ニモマケズ』(1931)
- 『よだかの星』
- 『雁の童子』
- 『雪渡り』 ※
- 『やまなし』 ※
- 『オツベルと象』 ※
- 『猫の事務所』 ※
- 『虔十公園林』
- 『なめとこ山の熊』
- 『銀河鉄道の夜』(1933)
- 『風の又三郎』(1934)



【花巻農学校の近くの田んぼに立つ賢治(29才)】

はじめて出した童話集
書いた童話をまとめた『注文の多い料理店』という本。どこの出版社でも出してもらえず、自費で出版した。

賢治はたくさんの童話を書きましたが、生前はさっぱり人々から注目されませんでした。しかし、賢治の死後、これらの作品は多くの人々に、はかりしれない影響を与えました。

さあ、みなさんも宮沢賢治の童話の世界にひたってみましょう。

- 【参考文献】 『「国語」に出てくる人物』(あすなろ書房)、『総合百科事典ポプラディア』10巻
『子どもの伝記6 宮沢賢治』西村鶏介文(ポプラ社)
5年国語教科書 p240～『宮沢賢治』(伝記)西本鶏介文